

言葉が享受され流行するプロセスに関しての一考察

——サブカルチャーと認知のメカニズムとの視点から——

足立雅代

1 はじめに

近年、マス・メディアの影響の下に、関西の芸人が全国的に広めた言葉が多数存在する。これらの言葉について、特に、松本（一九九九）では、送り手の側の視点からの詳細な分析がなされている。しかしながら、それらを享受していく側の文化的な背景や認知のメカニズムに関しての考察はなされていない。

言葉の流行のプロセスを考える際には、それを享受する側の視点も、当然、不可欠なものである。本稿では、この観点から、先の問題を取り上げてみたい。

2 ダウンタウンの「キレル」の使用例

松本（一九九九）では、最近、その使用が顕著である「キレル」が広まっていくプロセスを、関西の芸能関係者のインタビューに基き、考察されている。それを、筆者なりにまとめてみると、以下のようになる。

① 「堪忍袋の緒が切れる」からではなく、上方の楽屋言葉である「線切れる」から派生した。

② 一般に解釈されるように、「ムカつく」が積もり積もって「キレル」のだという因果関係はない。

③ 広めたのは、ダウンタウンである。

しかしながら、ダウンタウンの「キレル」の実際の使用例に
関しては、そこでは触れられていない。そこで、まず、ダウン
タウンの松本人志（以下、敬称略）の著書の中から、その使用
例を見てみることにする。尚、松本人志の著書『遺書』（一九
九四年刊）で記されているように、彼のエッセイは、総て、彼
自身の手によるものである。従って、その本文の言葉は、松本
人志自身のものであると考えて問題はないはずである。

まず、C Mの撮影時に起こったトラブルについての記述を、
以下に引用する。

その男は、図Ⅱの矢（筆者注・矢先が吸盤の矢）を使っ
てほしいと言うのだ。ムカムカツときたのだが、できるだ
け自分をおさえて「なぜですか？」と聞くと、最近のニュー
スでジョキング中の主婦が矢で撃たれるという事件があ
り、このC Mはそのことを連想させる恐れがある、できれ
ば矢先を吸盤にしてほしいというのだ。

フチャツ、フチフチ（堪忍袋の緒が切れる音）、（松）「あん
たらがオレの好きにしてええ言うたんちゃんかい！」（男）

「で、ですから普通の矢と吸盤の矢二つ撮りまして、こち
らで検討するということで・・・」（松）「どうせ吸盤のほ
う、使おうと思とんねんやろ！」（男）「そ、それは・・・」
（松）「もうええ、帰る！」（傍線部筆者・『遺書』六四頁）
更に、この状況に類似した取材の場面に關する記述も、以下
に引用する。

きっと会社には、雑誌社からの取材の依頼はきているの
だろうが、オレの耳に入る前に、勝手に断っているケー
スが非常に多いのだ。いや、確かに誤解をまねくのも無理は
ない。いままで何回か、取材中にキレて帰ったりしたこと
もあった。でも、それはインタビューがあまりにもバカ
だったり、カメラマンがアホだったりしたからで、取材が
嫌いなわけではないのだ。（同一三六頁）

これらの記述から、松本人志自身の言葉としては、「ムカム
カツ」として、フチフチャツと堪忍袋の緒が「キレル」のである
ということがわかる。^{（注1）}

勿論、楽屋言葉の「線切れる」から「キレル」への派生も、

事実関係として否定することはできない。しかし、このような事実とは別の次元で、使用者としてのダウンタウンの認識は、右記の通りなのである。そして、これは、当然、明確に分けて考えなければならぬことである。

又、松本（一九九九）で挙げられているダウンタウンのネタで、カレーライスを作っている母親が、何度も落ちてくる髪の毛に「キレて」、丸坊主にしてしまう例も、先の松本人志の文脈で解釈しても、何ら問題はないと言える。

その一方で、松本人志は、『松本』（一九九五年刊）で、松本（一九九九）で、楽屋言葉でよく使用されると指摘されている「おかしい」という意味での「キレる」も使用している。

なぜか昔から、少しキレたファンが多いため、ヤツらは時間を選ばない。明け方の四時ころ平気でマシヨンのインタホンを押して、「私を買ってください」という女が来たりする。
（『松本』一〇五頁）

しかし、この「キレる」の例も、理性によって制御されるはずの堪忍袋の緒が切れて、異常な精神状態となり、それが継続した結果としての「おかしい」への意味の拡張と考えることも可能で

ある。又、「キレる」ものが、「線」であろうと、「堪忍袋の緒」であろうと、「堪忍線」^{（註2）}であろうと、理性によって制御されるべきものという点では、意味する所は同じであると考えられる。このように、実際のダウンタウンの「キレる」の使用例を見ると、ダウンタウンが、楽屋言葉の「線切れる」^{（註3）}から派生したものとして、「キレる」を使用しているとは、一概には言えないのである。

3 言葉が享受されるプロセス

—ダウンタウンが広めたと言われる楽屋言葉は、果たしてダウンタウンにとって楽屋言葉であったのか。—

それでは、松本（一九九九）において、「キレる」を初めとして、ダウンタウンが広めたと言われる楽屋言葉は、果たしてダウンタウンにとって楽屋言葉であったのであろうか。

ダウンタウンの浜田雅功と松本人志とは、共に、一九六三年に兵庫県尼崎市で生まれた。そこで、同じ一九六三年に尼崎市近郊で生まれ育った人物三名に対して、ダウンタウンが吉本入りする一九八二年以前の言語の状況が、どのようなものであったのかを聞き取り調査した。

調査した人物のプロフィールは、以下の通りで、何れも女性である。

A 尼崎市出身・一九八一年に千葉県松戸市に転居。東京都内出身者と結婚し、現在は都内在住の為に、関西出身者と話す時以外は、完全に共通語話者である。

B 大阪市福島区出身・コミックやアニメに親しんでいて、大学では美術を専攻していた。

C 大阪市城東区出身・コミックやアニメには、あまり親しんでいなかったが、演芸番組や深夜放送には親しんでいて、大学では国文学を専攻していた。

特に、現在、Bは小学校教諭、Cは高等学校国語科教諭ということから、言語に関しては、一般の人よりも、規範意識は高いと考えられる。

又、プロフィールにおいて、コミックやアニメについてこだわった理由は、この世代が「劇画世代」と呼ばれ、アニメ等に關しての、いわゆる「オタク」を生み出した世代である為に、同時代のサブカルチャーとして、重要な役割を果たしていると考えられるからである。そして、松本人志自身も、彼へのイン

タビューをまとめた『松本坊主』（一九九九年刊）の中で、少年時代に貸本漫画を愛読しており、一時は、漫画家を目指していたと述べている。一方、アニメに關しても、『遺書』の中で、『宇宙戦艦ヤマト』のワープについて、『松本坊主』の中で、『トムとジェリー』を学校をズル休みして見ていたことが、それぞれ触れられている。

一方、馬瀬（一九八二）では、一九五八年以降の出生者では、そのアクセントに關して、テレビによる影響が指摘されている。更に、永瀬（一九九五）では、多くのキャンパス言葉を使う生は、映像志向型であるとも言われている。従って、この世代では、アクセント以外のことに關しても、映像的に言語を捉える傾向があるのではないかと考えるからである。事実、松本人志自身も、次のように、映像的な表現を行っている。

以前、番組で二、三回（筆者注・ゴルフを）やって見たが、何がおもしろいのかまったくわからず、頭の中にずうっとクエスチョンマークが点灯していた。（『遺書』九七頁）

次に、プロフィールにおいて、演芸番組についてこだわった理由は、松本人志が『遺書』の中で、以下に記すように、小学

生の頃から、「花月」に通っていたり、

あれは、確か小学校の二年生ぐらいのときだったと思うが、おやしが花月（吉本の演芸場）のチケットを会社でもらって来た。（そのときのおやしはチケットが手に入る仕事をしていたらしい。）漫才、落語、吉本新喜劇、それこそ毎月のように家族で見に行った。そうすると、目も耳も肥えてくる。

（四三頁）

『松本坊主』の中で、テレビで吉本新喜劇をよく見ていたことを、以下のように、述べているからである。

花月に行ってから、テレビとかでお笑いについて必死になって研究したとかっていうことですか？や、でもねえ、それはねえ、大阪の子供たちっていうものはだいたいそうでしたよ。それはわりかし日常的なことで、僕に限らずみんな、土曜日は早よ帰って、昼飯家で食いながら吉本新喜劇観るっていうのはもう、すんごく当たり前の、普通のことですからね。うん、みんなそうしてたと思うんですね。

（三一頁）

最後に、プロフィールにおいて、ラジオの深夜放送にこだわった理由は、米川（一九九八）でも指摘されているように、一九七〇年代の若者語に、非常に影響を与えたということからである。特に、関西では、DJとして芸人が登場する場合が、非常に多いことも理由に挙げられる。

それでは、松本（一九九九）で取り上げられている、ダウンタウンが広めたとされる楽屋言葉について、検討を加えたい。まず、それらを、次の二種類に分類する。

I 芸人の世界以外でも使用されている、Lakoff（一九八七）や「Zator」（一九八九）や山梨（二〇〇〇）等で指摘されているような、一般の使用例の意味が拡張されて、楽屋言葉として使用されているもの

キレる・イタイ・寒い等

II 芸人の世界のみで使用されてきた楽屋言葉

タレカク

初めに、Iの「キレる」の例を考えてみたい。

先に挙げたAによると、一九七〇年代後半の尼崎界限では、当時の中学生の間で、「ブチッと切れる」、もしくは、単に擬態

(図1)

語のみで「ブチッ」という表現が、怒りの表現として使用されていたとのことである。勿論、コミックで、怒りの場面に、「ブチッ」という擬態語が記されるのは、「ブチッ」と切れる」が広く一般的に使用されるようになった、一九八〇年代以降である。しかし、それ以前でも、コミックでは、次に示す(図1)のように、怒りの場面では、何かを引きちぎる描写と共に、「ブチッ」という擬態語が使用されていたのである。つまり、怒りと「ブチッ」という擬態語は、全く遊離したものではなかったのである。これは、事実関係として、正確か否かとは別の次元で、漫画家弘兼憲史の、次の記述からも理解できる。(引用は、『弘兼憲史の会社新作法』(二〇〇〇年刊)による)

(池田理代子『ベルサイユのばら』
第1巻(1972刊))

(図2)

(同 第2巻(1973刊))

「キレる」という言葉はいつ頃から流行しはじめたのだろうか？ たぶんこの表現は、コメカミのあたりに浮き出た血管が、怒りが頂点に達すると同時にフチャッと切れるという、たぶん漫画的（とかビジュアル的とか）な連想から生まれたものだろうが、中高生の間で流行しているものだと思っていたら、最近ではいい大人でも「マジギレ」だの「フチギレ」だのと平気で言い合っている。

又、「キレる」という言葉が広まる以前でも、「キレる」人物自体は存在していた。例えば、アニメの『巨人の星』（梶原一騎原作・一九六八年〜一九七二年放送）の主人公である星飛雄馬の父である、怒ってちゃぶ台をひっくり返す星一徹や、ドラマの『寺内貫太郎一家』（向田邦子脚本・一九七四年放送）で、息子役の西城秀樹と取っ組み合いのケンカをする小林亜星演じる寺内貫太郎等である。特に、寺内貫太郎に関しては、先に挙げた弘兼憲史が、次のようなことを記している。（引用は、先に同じ。）

そんな子供（筆者注・「キレる」子供）がそのまま成長すると、今度は自分の妻や息子・娘に対して暴力を振るい

始める。故・向田邦子さんの名作テレビドラマ「寺内貫太郎一家」では、小林亜星さん演じる主人公が何かというとちゃぶ台をひっくり返して、怒鳴っていたが（最近では往年のメンバーが揃ってコマーシャルに登場しているので、ご記憶の方も多いと思う）、現代の暴力亭主はかつての雷親父とまったく性質がちがう。

実際、二〇〇〇年九月二十二日に放送された『寺内貫太郎一家2000』では、恒例の乱闘シーンの後で、貫太郎の母に、

いや、今夜は、みんなキレた。貫太郎も里子さんも・・・

と語らせている。当然、脚本は、向田邦子とは違う金子成人であるが、演出は、当時と同じ久世光彦である。又、久世光彦は、『二ホンゴキトク』（一九九六）等で、向田邦子の言葉使いについて詳しく記していることから、ここでの「キレる」は、当時の向田邦子の言語感覚を反映した使用例であると考えられる。そして、昔ながらの雷親父のこのような「キレ」方を、貫太郎の母に「いいキレ方」と言わせているのである。

これらのことから、楽屋言葉である「線切れる」を介在しな

くても、「キレル」という表現を、受け入れ使用することができ、山梨(二〇〇〇)で定義された言語使用の文脈における拡張の土台となるスキーマが、ダウンタウンと同世代の人々には、存在していたことがわかるのである。

次に、1の「イタイ」の例を考えてみたい。

松本(一九九九)でも引用されている中田(一九七八)の「イタイ」の解説を、以下に挙げる。

いたい どこが痛いかという頭痛い人のことで、とっても頭痛持ちではなく、いわば頭がいたんでいる人のことをいう。東京で馬鹿、大阪で阿呆。「あいつ一寸痛いで」というと「一寸頭が何笑しい」ということになる。その人間と話をしているとこっちの頭が痛くなる。

最後の部分の「こっちの頭が痛くなる。」に関連して、先に挙げた(図2)のように、問題を起こす困った人物に対して、頭が痛いことを示す為に頭を抱える表現は、当時のコミックでは、よく見られたものである。又、Cによると、「いたいたしい」という言葉を介在することによって、「イタイ」の「おかししい」への意味の拡張は、類推可能であるとのことである。つ

まり、「イタイ」の楽屋言葉としての意味の拡張の土台となるスキーマも、やはり、ダウンタウンと同世代の人々には、存在していたのである。

これらの「キレル」や「イタイ」について、共通して言えることは、コミック等の視覚的な映像を、媒介として用いることである。例えば、コミック等で使用される「ブチッ」や「イタッ」や「ドサッ」や「グサッ」等といった擬態語を、そのまま普段の会話で使用することは、「劇画世代」以降の人々にとっては、日常茶飯事の用法である。従って、楽屋言葉からの用法とされるものも、コミック等の擬態語等の用法によって、意味の拡張の土台となるスキーマが、形成されている可能性が高いのである。更に、1の「寒い」の例を考えてみたい。

まず、中田(一九七八)の「寒い」の解説を、以下に挙げる。

さむい まずい芸のこと。背筋が寒くなるから。貧しいと寒い。白ける場合もいう。

松本人志の「寒い」の使用例をみると、確かに、この「背筋が寒くなる」感覚としての例がある。(引用は、『松本坊主』による)

一回目のことはあんまり覚えてないんです。でも何かちよっと物珍しいものを観てるみたいなき感じの顔してましたよ、客は。まあ、俺らのこと知らないんだからしょうがないかもしれないですけどね。あれは、でもねえ……「薄らさむい」というかな。いわゆるウケない、「さむい」っていう言葉をよく使いますけど、そこまでは行かないんですけど薄らさむいですよ。「いいけど、うーん、何かもう一枚羽織るもんじゃないかな」みたいな感じでしたね。(一九三頁)

そして、この「つまらない」の意味が拡張した用法として、次のような例もある。(引用は、『松本人志 愛』(一九九八年刊)による)

あ、でも、テレビの前で「うわっ、さぶっ」って言うてもうたんですけど、あいつ(筆者注・一九九七年に神戸で起きた小学生殺人事件の犯人の少年のこと)、声明文みたいな、ゲームとかマンガとか、引用したりしてるんですよ。「結局そうなんかい」と思て、すっごい寒かったんですよ。またこんなこと言うて誤解を招きそうやけど、殺人ぐらい己独自のもんでやれよ、て。いや殺したらあかんね

んけど(笑)。そうか、彼の物差しもたいしたことないね。(九八頁)

例えば、Aによると、つまらないギャグを言った時に、「寒い」と言う表現は、当時の尼崎界限の中高生の間では、既に使用されていたことである。又、Cによると、そのような文脈で「寒い」を使用することはなかったが、共通語の「鳥肌が立つ」に対応する関西方言の「寒イボが立つ」という表現から、類推可能であるとのことである。

この「寒い」と「寒イボが立つ」との関係については、次に示す今田耕司の発言、

全身タイツの下、寒イボだらけですもん。

に対する松本人志の発言からも、

いや、寒かった。

『わらいのじかん』二〇〇〇年一月八日放送

その関連性が理解できる。そして、同様の例は、つまらない発

言に対する、次の上沼恵美子（一九五五年生・兵庫県南淡町出身）の二つの例が、同じように使用されていることからわかる。

寒イボ、寒イボ、寒イボ。

（『快傑えみちゃんねる』二〇〇〇年七月十七日放送）

わっ、寒っ。（『同』二〇〇〇年七月二十四日放送）

従って、関西方言話者にとっては、特別な用法ではないことがわかるのである。

最後に、Ⅱの「タレカク」の例を考えてみたい。

この「タレ」を女性の隠語とすることに關しては、既に、米川（一九九八）において、大正時代の東京の不良仲間の隠語であるという記述が、松崎天民『社会觀察万年筆』（一九一四年刊）にあることが指摘されている。

又、Cによると、Cの高校時代の頃、ラジオ大阪で放送されていた『鶴瓶・新野のぬかるみの世界』（一九七八年四月～一九八九年十月放送）で、使用されていたとのことである。この番組は、笑福亭鶴瓶（一九五一年生・大阪市出身）と放送作家の新野新（一九三五年生・大阪市出身）がDJとなり、日曜日の深夜に放送され、翌日の月曜日の学校では、必ず話題になる

くらしい人気番組であった。『ラジオ大阪三十五年のあゆみ』（一九九三年刊）によると、一九八〇年五月十日に、「みんなが新世界へ行く。」という番組の呼びかけに、五〇〇〇名以上が集まり、翌日の『朝日新聞』朝刊の記事になったり、番組単行本『鶴瓶・新野のぬかるみの世界』が一九八一年に出版され、一週間後に十萬部が増刷になったりと、当時の十代を中心として、幅広い影響力があった。

この番組では、「ぬかるみ語」という独特の言葉が使用されていた。そして、この中には、現在の若者語の造語法の基となるような例が見られる。例えば、単行本『鶴瓶・新野のぬかるみの世界』によると、現在の「バイトつながり」等の「〜つながり」といった造語の用法として、男女間に性的関係がある意味の「しもつながり」の例が見られる。又、「ぬかるみ語」の中の例でなくても、何かつまらないことでも真剣に語り合うことを「〜談義」と造語する用法として、「おにぎり談義」や「ブメコ談義」や「おさせ談義」といった例が、何か一つの目的に何人かで集まって行くことを「〜ツアー」と造語する用法として、「ぬかるみツアー」という例が、人に知られずこっそり何かをしている人を「隠れ〜」と造語する用法として、「隠れぬかる民」という例が、この『鶴瓶・新野のぬかるみの世界』に

見られるのである。

その一方で、米川（一九九八）の中で、一九七〇年代後半に盛んに行われていたという、「い」をつけて形容詞を造る用法で造語された「鬼畜い」や「ユニークい」の例が、「ぬかるみ語」として、『鶴瓶・新野のぬかるみの世界』に記されている。このように、言葉に関しても、当時の若者に影響を与えていたことがわかるのである。

そして、先のCが高校時代に聞いた内容は、笑福亭鶴瓶が新野新に、素人が落語家と話をしている、「タレ」って知ってまっか。」と、小指を上げてみせたのを見たが、玄人の言葉を素人が使うのはいやだといったものだったということである。Cによると、これによって、「タレ」が楽屋言葉で「女性」を意味することを、知ったとのことである。

事実、後の一九八六年に出版されたものであるが、『鶴瓶・新野の「ぬかるみの世界」おもしろうて、やがて哀しきボペココな』では、次のように、「タレをかく」の例が見える。

鶴瓶 一般の人のマジな会話のなかで、こんなことがフツと出てくるからおもしろい。我われのような芸人が使う符丁^{ふぢょう}というか隠語なんかではおもしろくないのよね。芸

人もよく「タレをかく（女の子をモノにする）」なんていますけど、彼女の場合の「かく」というのは、それとも違う。

新野 要するにマスターベーションの「かく」やわね。

鶴瓶 僕は芸人ですけど、芸人さんが使う隠語なんかは、あまり好きになれませんね。あまりおもしろいというものでもないしね。

新野 そうやね。僕もそうやな。「タレをかく」とか「ロセン（お金）」とかね。（二四九頁）

又、一九八〇年前後の漫才ブームの頃を、広島大学の過ごしていたCの夫（一九六〇年生・大阪府東大阪市出身）によると、関西の芸人が、アニメの『デビルマン』に出てくる「タレちゃん」というキャラクターが、楽屋言葉の「タレ」を想像させて面白い、といった内容のことを耳にして、「タレ」が楽屋言葉で「女性」を意味することを、知ったとのことである。つまり、この当時、既に、関西圏以外の地域でも、メディアを通じて、「タレ」という楽屋言葉は、広まっていたのである。

このようにして見てくると、松本（一九九九）で、ダウンタウンが広めたとされる楽屋言葉は、彼らにとっては、決して、

特殊なものではなく、吉本入りする以前から、普段、耳にしていたり、使用していたりしていた言葉、もしくは、そこから意味が拡張していった言葉の例が多いのである。

事実、グウンタウンは、吉本興業がタレント養成の為に作った学校吉本総合芸能学院（NSC）の第一期生であり、それまでの芸人とは異なり、誰かに弟子入りをするという形式で、芸能界入りしたわけではない。その為に、花月の初舞台の時にも、芸人の世界のしきたりを、吉本の社員に教えてもらったことが、『松本坊主』に述べられている。

で、当時、吉本興業の富井さんてー今はかなり偉なってると思いますよ、かなりの重役になってると思うんですけどーその方にいろいろ教えてもらって。「とりあえず楽屋に行ったら『おはようございます』て言うんや。芸人の世界は何時やろうが『おはようございます』て言うんや」て教えてもらうて、「舞台上がる前はいろんな先輩の楽屋に行って『お先に勉強させてもらいます』て言うて、で、終わったら『お先に勉強させていただきました』って言うて、帰る時もちゃんと挨拶して帰れ」って。そんなん全部教えてもらって。

普通はそんなん師匠が教えてくれるし、教えるも何も弟子にしたら知らず知らず身についていくもんですよ。

（二〇六頁）

又、一般の使用例からは類推しにくい楽屋言葉を使用する時には、次のように、注釈を付けて用いているのである。

で、正月出番の時にーあいつ何回か遅れて来てたんですよ。僕ら芸人用語で言う「トチる」ってやつなんですけど、遅刻したんが一回か二回あって。 【同】一二三頁）

つまり、従来の芸人とは、楽屋言葉の接し方が、根本的に異なっているのである。しかし、芸能界入りして初めて耳にする楽屋言葉がある一方で、芸能界入りする以前に、メディアを通じて耳にしたり、楽屋言葉を一般の使用例の拡張として理解してきたものも多数存在しているのである。そして、後者の例は、あまり特殊な用法であるとは、認識されていないはずである。これは、グウンタウンが広めたとされる楽屋言葉に対して、使用したことはないが、特殊な用法であるという違和感を感じないという、Bの感想からも裏付けられる。

例えば、米川（一九九七）に、「若者ことば」として収録されている「うっとい」や「きしよい」や「きもい」や「やばい」や「つれ」等の言葉が、『ABCお笑い新人グランプリ』（二〇〇〇年一月十日放送）に出場した二十代前半の漫才コンビの間では、ごく自然に使用されている。それと同様に、ダウンタウンが広めたとされる楽屋言葉も、彼らにとっては、決して特殊な言葉ではなく、自分たちが普段使用していた言葉や、その拡張した用法として、ごく自然に使用したのではないかと解釈できるのである。

4 言葉が享受されるプロセス

↓ダウンタウンが広めたとされる楽屋言葉は、

何故人々に受け入れられたのか。↓

それでは、ダウンタウンが広めたとされる楽屋言葉は、何故人々に受け入れられたのであろうか。

前節で取り上げた1の一般の使用例の意味が拡張されて、楽屋言葉として使用されているものの例の中で、「キレる」や「イタイ」の例は、言語使用の文脈における拡張の土台のスキーマによって、人々に享受されたと考えられるので問題はない。そ

こで、関西方言話者にとって違和感なく受け入れられた「寒い」が、何故、関西方言話者以外にも受け入れられたのかを考察したい。

関西方言話者以外の人々にとって、「寒い」という言葉が流行する以前に、つまらないギャグを言った時には、左の(図3)のように、「白けた」表情として「固まった」表情が、コミック等では描かれていた。そして、そこから、「固まってしまっ

(図3)

(さくらももこ『ちびまる子ちゃん』第3巻(1988年刊))

とか「凍りついてしまう」といった言葉が使用されるようになっていったのである。又、(図4)のように、場が寒くなる表現として、寒い北風が吹く描写も、コミック等では描かれていた。更に、方言においても、福岡県等では、「しけてる」という言葉が使用されていたのである。

これらの表現に共通して言えることは、寒冷感を表す言葉であるということである。つまり、つまらないギャグに対して、「寒い」という表現を、Battel(一九三二)の言うような想起を可能にすることができる、山梨(一九九五)で述べられた認知プロセスのイメージスキーマは、既に、形成されていたのである。

そして、関西方言の「寒イボが立つ」に対応する、共通語の「鳥肌が立つ」が、次のように、感動を表すプラスの意味の用法に、転用されることが起こっても、

初回上映後には映画では珍しいスタンディングオベーションが約五分も続くひと幕も。織田(筆者注、裕二)は「こんなに鳥肌が立ったのは初めて。(以下略)」

(『日刊スポーツ』二〇〇〇年八月二十日第一版)

「寒イボが立つ」が、プラスの意味の用法に転用されることは、山梨(二〇〇〇)の体感性と意味の拡張の関係からも、可能性は少ないと考えられるのである。

又、ダウンタウンが広めた言葉ではないが、山梨(二〇〇〇)における言葉の身体性と関連して、松本(一九九九)で、楽屋言葉であるという、「おいしい生活」に代表される、「おいしい」の用法について考えたい。

まず、先に挙げた関西方言話者に、「おいしい」の用法について、聞き取り調査を行った。Cによると、「おいしい生活」というコピー(一九八二年)以前に、「おいしい話」等といった表現を耳にしていたので、味覚表現を「生活」という言葉の修飾語として使用すること自体は、取り立てて新しい用法であるという印象を持たなかったとのことである。これは、AもBも、同様の感想である。

一方、関西方言話者以外の場合でも、「うまい話」や「まずい事」等のように、味覚が嗅覚、視覚、聴覚の原感覚に対して、共感覚になり得ることが、山梨(一九八二)において、既に指摘されている。

従って、この例の場合、人間の共感覚に根差した用法であるので、どの方言に限らずに、広く人々に受け入れられていった

のだと考えられるのである。

更に、楽屋言葉ではないが、松本(一九九九)において、ダウンタウンが広めたとされる、関西の庶民の言葉であった「おかん」の例について考えてみたい。

「おかん」という言葉に対する感想を、北川悦吏子は、「おかの驚異」として、次のように述べている。(引用は、『恋のあっちゅんぷりけ』(一九九九年刊)による)

さて、このエッセイで何を書こうとしているかというところ、おかの驚異である。

おかん……この響き。関西の人たちは、たいていお母さんのことを、こう言う。いや、知らないけど。関西出身のともだちに聞いたら、おかんはあんまりいい言葉じゃないから、お坊ちゃんには言わない、ということだった。ウルフルズもおかん、と言うし、シャ乱Qもおかん、と

言う。ダウンタウンも言うんだろうな。

これを聞く時、私はいつも、太刀打ちできない！と強く強く思う。

冬彦さんは、ママーと言いなから、木馬に乗っていたが、あの野際陽子には、どうにかすれば、太刀打ちできるよう

な気がする。

ママも、お母さまも、マミーも（こんな風に呼ぶやつないか）、おふくろ、でさえも、嫁は太刀打つ手だてがあるとと思う。

でも、おかんは駄目だ。無敵だ。男の子はやっぱりみんな、例外なくマザコンだろうか。

・・・（中略）・・・

おかんの話にもどうう。このように、無敵なおかんであるが、厄介なのは、関西出身の男の人が、おかん、と言う時、あ、かわい、と恋心を刺激されてしまう、という点である。私だけ・・・？

（三二頁）

ここからは、ダウンタウンが使用しているか否かとは別の次元で、関西方言話者以外の人々にも、「おかん」という言葉が、好感を持って受け入れられていることがわかる。

そして、松本人志自身も、人気を得た『おかんとマー君』というコントについて、『松本坊主』の中で、次のように述べている。

僕が一つびっくりしたと言うか不思議やったのは、大阪

の子はきっとこれ観ておもしろいと思うやろなと思ったんですよ、あれは大阪のおかん特有のものやから。それ以外の地方の人が、これ観てなんでおもしろいと思うんやろなっていうのは不思議やったんですよ。でも、やっぱり、言葉は違うにせよ、おかんてやっぱり全国共通なんですね。やっぱり全国共通でおかんはクラーはすぐ止めようとするんですね（笑）。

（二二一頁）

つまり、母親を表す言葉が、各地の方言で異なっていたとしても、「おかん」のキャラクターのイメージスキーマは、全国共通なのである。だからこそ、そのイメージスキーマを象徴する、「おかん」という言葉が、人々の間で、受け入れられて広がっていったのである。

このようにして考えると、ダウンタウンが広めたとされている言葉は、人気者のダウンタウンが使用したから広まったという理由ではなく、享受する側の人間に、それを受け入れる何らかの認知的な要因が存在したから、人々の間に広まっていったのである。

例えば、松本人志は、『遺書』の中で、

オレはギャグ（流行語）が大キライだ！

・・・（中略）・・・

オレにも気に入ったフレーズがあり、何度が使っているうちに、だんだんはやりだし、ギャグになりかけたこともある。でも、それを察知した瞬間、二度と使わないように心がけている。

（五一頁）

と記している。又、ダウンタウンの漫才を、「チンピラの立ち話」と評した横山やすしに対して、

チンピラの立ち話でおおいに結構だ。チンピラが立ち話をしてるので、聞いてみたらおもしろかった。最高やないか！それこそオレの目指す漫才なのである。（九四頁）

とも記している。従って、ダウンタウンの方でも、意図的に何かの言葉を、広めようとしたわけではないのである。享受する側の人間が、その使用例に対して共感を持ち、自身も使用してみることによって、それらの言葉は広まっていったのである。

例えば、このダウンタウンとは、全く反対のアプローチであるが、落語家の桂三枝は、何かギャグを作り出そうとした時に、

今までに流行したギャグの例を、総て集めて分析し、その結果、そのほとんどが「感嘆語」であることがわかり、自身も「感嘆」の表現である「オヨヨ」というギャグを、作り出したとのことである。（『ナンバ巷番館』二〇〇〇年八月二十四日放送による）これも、享受する側の人間にとって、「感嘆」の表現が受け入れられやすいという事態認知のプロセスを、結果として、利用したものであると考えられるのである。

又、一九九九年三月に、大ヒットした『だんご三兄弟』を作詞したCMプランナーの佐藤雅彦が、コピーを作る際のルールとして、次のようなことを記している。（引用は、『佐藤雅彦全仕事』（一九九六年刊）による）

これを見ていた僕はある事に気付き、それを確かめるためにそつとつぶやきました。

「ダチツデドー」

もうひとつつぶやきました。

「バビベポー」

そして何回もそれらをつぶやき、濁音が唇と鼓膜にとても気持ちがいいことを確認しました。

「濁音は、言葉として今、とても強いんだ」

このことを僕は「濁音時代」と呼び、コピーを作る際の
ルールのひとつとしました。(二九〇頁)

そして、このルールに基づいて、「ドンタコス」や「バザー
ルでゴザール」等のCMを製作したのである。これも、日本語
には、本来、語頭濁音が存在しないことによる、語頭濁音の違
和感から生まれるインパクトを、結果として利用したものであ
る。つまり、享受する側の人間に、インパクトを持って受け入
れられる要因が、既に、存在していたのである。

一方で、これとは逆の場合もある。

例えば、触れてはいけないことに触れてしまい、墓穴を掘って
しまうという意味で、「地雷を踏む」という表現がある。これ
は、ドラマ『ロングバケーション』（北川悦吏子脚本・一九九
六年四月～六月放送）で使用され、小矢野（一九九六）では、
このドラマによって、この表現を知った若者が多いという報告
もなされている。しかしながら、この番組プロデューサーが、
各TV情報誌において、この表現を流行させると語っていたほ
どには、現在、定着してるかといえは、必ずしも、そうではな
いと考えられるのである。

それでは、その理由は、一体、何なのであろうか。

それは、既に、「地雷を踏む」以前に、「オラウータンに核ボ
タンをみがいてもらうよりヤバイ・・・」（『行け！稲中卓球部
・その97』（一九九五年刊））や、「核ミサイルのボタンを押す」
（米川（一九九七）に収録）といった表現が、流布していたか
らである。又、『ロングバケーション』の第一回でも、早くも、
次のようなやりとりが見える。（引用は、角川文庫版『ロング
バケーション』（一九九八年刊）による）

「自分だって何が『アンアン』のモデルだよ。イチキェ
ツパの割烹着着て」

「あ・・・地雷踏んだ」

「こっちだって踏まれまくり。だいたい、俺は人に干渉
されるのが、大嫌いな。なのになんで・・・男に逃げら
れた三十女と一緒にいなきゃいけないんだよ。」

「あ・・・っ」南の顔色がさっと変わった。

「・・・」さすがにちよつと言い過ぎた。顔名ははっと
したが、もう遅かった。

「核ミサイルの発射ボタン押したね。わかったわよ。出
てきゃあ、いいんでしょ！出てきゃあ！」南は踵を返した。

(四六頁)

当然、享受する側の人間が、「地雷」を越えて、「核ミサイル」まで、エスカレートしているのであるから、今更、「地雷」という表現が受け入れ難かったことは、容易に理解できる。つまり、たとえ、視聴率三〇%を越えようと、それを身に付けただけで、品切れが続出すると言われている木村拓哉が使用しようとして、享受する側の人間に、受け入れられる基盤ができていなければ、流行語として広まっていくことは、非常に困難なのである。

5 まとめ

以上、ダウンタウンが広めたとされる言葉について、それが広まっていったプロセスや理由を、サブカルチャーと認知のメカニズムの視点から、考察を行ってきた。その結果、言葉というものは、単に、人気者で影響力がある人間が使用するから広まるというのではなく、それを享受する側の人間に、意味の拡張の土台となるスキーやイメージシスキー等が存在するといった、何らかの要因があるから、広まっていくのだということがわかった。

桂(二〇〇〇)では、落語の笑いについて、「(言語表現)をキャッチするお客さんのアンテナの感度」も重要な要素である

としている。これは、何も、落語に限定されるものではない。言葉そのものも、享受する者のアンテナにキャッチされたものが、広く流行していくのではないかと考えられるのである。

《注》

(注1)「キレル」と同じ文脈で、桂枝雀(兵庫県神戸市出身・一九三九年生)の場合は、「気が寄る」を、次のように使用している。(引用は、『桂枝雀のいけいけ枝雀、機嫌よく』(一九八八年刊)による)

(七十二頁)

なにかポーンと気が寄ってしまったと、もう職員室のガラスを割ることぐらいなんともなくなる。(七四頁)

この「気が寄る」については、大阪市港区出身で一九四〇年生の男性によると、少なくとも一九七〇年代頃までは、大阪市内(特に下町界隈)では、普通に使用されていたことである。

(注2)(注1)の男性によると、「キレル」ものとして、「堪忍線」の例もあったとのことである。又、直接、言葉にしないで、人差し指と中指との二本指を立てて、こめかみ

の所を切る仕草で表現したりしたそうである。

(注3)「線切れる」の使用例として、笑福亭鶴瓶の次のようなものがある。

(番組収録を見に来た観客に対して)

(大阪府知事に桂さこばがなったとしたら)線切れ

の知事ですよ。(『鶴+龍』二〇〇〇年一月八日放送)

桂さこばは、新聞の朝刊のテレビ欄に、その日の生放送であるにも拘わらず、

おかしい!! ところが倒産裏事実に大激怒!! 八方さこば

爆発

(『朝日新聞』二〇〇〇年七月十七日朝刊大阪本社第

一三版)

と記されるくらいに、「キレる」芸人としては有名である。

しかし、この「線切れ」の発言を聞いた観客の反応が悪かった為に、「ワッと怒ったりして」等と、仕草を加えて、「線切れ」の解説を加えている。

(注4)例えば、テレビオリジナルのミステリー『ミステリー

な夜・綾辻行人有栖川有栖からの挑戦状!! 安楽椅子探偵登

場』(一九九九年十月八日放送)では、犯人の謎解きの伏

線が、ショーウィンドウに映った犯人の姿である。これに

関して、作者である綾辻行人(一九六〇年生)と有栖川有栖(一九五九年生)は、テレビという視覚的な媒体だから可能であったと述べている。逆に考えれば、この世代だからこそ、このような伏線の表現が可能であったとも言えるのである。

(注5)勿論、この場合も、一般の使用例の意味の拡張の結果としての楽屋言葉である。しかし、ここでは、現代語において、意味の拡張の理解の範囲であるものに限定した。

(注6)同じ楽屋言葉である「線切れる」を使用しない理由を、新野新は、次のように述べている。(引用は、『ボンコの憂鬱』(一九九五年刊)による)

ぼくは大体、線が切れる、などという表現は嫌いで、簡単に、線が切れた、といういい方は日常的にしないし、線が切れるということとは余りない。(七八頁)

(注7)足立(二〇〇〇)では、共通語の女性の文末表現「ダ」が、近年のドラマのシナリオにおいて使用される以前に、向田邦子のシナリオでは、既に、使用されていたことを指摘した。しかし、ダウインタウンとはほぼ同世代のシナリオライターのインタビュを集めた『彼女たちのドラマ シナリオライターになった女性たち』(佐竹大心編・二〇〇〇

年刊)によると、高橋留美(一九五九年生・広島県出身)や井上由美子(一九六一年生・兵庫県出身)や小松江里子(一九六二年生・大阪府出身)等は、シナリオを書く際に、向田邦子の影響を非常に受けたと述べている。ならば、文末表現「ダ」も、もっと直接的な影響関係がある可能性が高いと考えられる。又、三谷幸喜(一九六一年生・東京都出身)も、『三谷幸喜のありふれた生活24』(『朝日新聞』二〇〇〇年十月十三日夕刊大阪本社第三版)で、向田邦子の『あ・うん』はドラマの教科書であると述べている。つまり、ダウンタウンと同世代の言語を考察する際には、テレビ等のメディアの影響が、非常に重要となってくるのである。

(注8)漫才師西川のりおの少年時代を描いたドラマ『オカン』(二〇〇〇年九月三日放送)では、のりお少年が運動会で頑張った姿を見た父親が、

お父ちゃん、寒イボ立ったわい。

と、声をかけている。このシナリオを書いた森下直(一九六四生)は大阪府出身なのであるが、この例は、共通語の「鳥肌が立つ」がフランスの意味に転用されたのを受けて、それに対応する関西方言「寒イボが立つ」を機械的に使用

したもので、体感性による意味拡張ではないと考えられる。(注9)実際のドラマのビデオによっても、確認作業を行った。

《参考文献》

Barlet, F. C. (一九三二) Remembering. (宇津木保・辻三三(訳)一九八二『想起の心理学』)

Lakoff, George (一九八七) Woman, Fire, and Dangerous Things. (池上嘉彦・河上哲作(訳)一九九三『認知意味論』)

Taylor, John R. (一九八九) Linguistic Categorization. (辻幸夫(訳)一九九六『認知言語学のための14章』)

足立雅代(二〇〇〇)「共通語らしさ」と「関西弁らしさ」——「ダ」と「ヤ」と「ネン」——『甲南国文』第四七号

桂文珍(二〇〇〇)『文珍流・落語への招待』

小矢野哲夫(一九九六)「テレビと若者ことば」『日本語学』一九九六年九月

永瀬治郎・岡隆・池田理恵子(一九九五)「集団語の知識・使用と言語意識・パーソナリティの関連について」『専修国文』第五六号

中田昌秀(一九七八)『笑解現代案屋ことば』

馬瀬良雄(一九八一)「言語形成に及ぼすテレビおよび都市言

語の影響』『国語学』第一二五輯

松本修（一九九九）「キレル・ムカつく考―大阪の芸人が広め

た言葉―』『地域方言と社会方言・日本語学一九九九年十

一月臨時増刊号』

山梨正明（一九八二）「比喩の理解」『認知心理学講座3・推論

と理解』所収

山梨正明（一九九五）『認知文法論』

山梨正明（二〇〇〇）『認知言語学原理』

米川明彦（一九九七）『若者ことば辞典』

米川明彦（一九九八）『若者語を科学する』

《追記》

言語調査に協力していただいた方々、貴重な資料の閲覧をお許し下さったラジオ大阪の方々には、記してお礼を申し上げます。